

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中郵支部
機関紙・「みらい」
NO. 3845
18年4月10日(火)
・Fax 095-828-1953

勤続47年！ 山本恭郎さん、ご苦労様でした

おはようございます。

この三月で退職をされた山本恭郎さん（長崎中郵第一集配営業部）の慰労会を、四月六日、鍛冶屋町の浜勝で開きました。会には三名が参加し、勤続四十七年の（継続雇用を含む）の山本さんをねぎらいました。

会の初め高口美和子支部長が退職をねぎらい、職場の同僚の豊田さんが花束を贈呈し



ました。山本さんは「集配一筋の四七年間でしたが、郵政ユニオンのおかげでやってこられた。ありがとう！」と仲間への感謝の言葉を述べられました。

山本さんは一九七一年、長崎中郵の第二集配課（のち四集課）に入局され、当時の全通に加入されました。そのころは郵政の全通差別攻撃と弾圧が最も激しい時代でした。

一九七三年の年末闘争で、全通が休憩室で闘争の報告をしていたとき、管理者たちが休憩室におしかけます。そのとき山本さんが暴行を働いたとして刑事事件となります。

郵政と全通本部は全国的な年末闘争の終結の障害となったとして、支部長の辞職と山本さんの他局への配転合意を要求してきました。「応じなければ山本は免職」の攻撃で、目的は全通長中支部の解体でした。

支部は全員参加の臨時大会を開き、免職攻撃をはね返しました。このとき支部や山本さんが、毅然と対応していなければ、その後の全通長

中も、また山本さんのいまもない、まさにギリギリの選択でした。（なお、山本さんの名譽のために付記すれば、刑事事件は不起訴で、もともと事実無根だったので。）

そして次が一九八九年の労働界再編です。全通の連合加入に反対して、今の郵政ユニオンが当時の郵政長崎労組（郵崎労）として独立労組を四〇人で立ち上げます。

この四〇人の反連合の決意はいかにして生まれたのか。無論、当時の左派活動家のなかでの多数は反連合でしたが、全通を脱退することには抵抗感がありました。

当時、私たちは「連合に反対する会」を職場内で作っていました。全通長崎地区本部も連合加入を決めます。一九九〇年二月、連合反対派は右に行くか、左に行くかで議論が分かれました。「反対する会」の内部でも「支部の組合員と離れ、独立するのはいかにか」という出口のない議論で苦しんでいました。

このとき山本さんが「支部の三〇〇名も大事だが、連合に反対する会に結束した仲間志はもっと大事なのではないか」と発言しました。これで流れは決まりました。



そうなのだ。組織はその中心核が一番大事なのだという極めて常識的な、しかし一番大事な組織論の視点を私たちは忘れていたのです。この山本さんの一言で一気に組織独立論が大勢を占め、郵崎労結成へと向かいます。

この山本さんの言葉に支えられた郵崎労は、それから三カ月間の組織争奪戦をたたかい、結成大会の情報（日時、場所）を事前に漏らすことなく、無事、旗揚げができました。その結成に加わった四〇人も、またその間に加入された多くの仲間も、組織と仲間を大事にする「郵崎労スピリット」を誇りに、頑張ってきました。

普段、山本さんは他人の前で雄弁に語る人ではありません。とつとつとした語り口で、いつとこの活動家タイプで

はありません。しかし、たまたかの意思はだれよりもしっかりしています。これがその証明でした。その彼の地道な努力と活動により、郵政ユニオン長崎の今があります。

送別会の帰り道、思案橋で仲間との会話です。「やはり山本さんは郵政ユニオンの骨台骨でしたな。」「まさに重石ですね」ということで意見が一致しました。山本さん、本当に長い間、ご苦労様でした。今は少し体調を崩しておられますが、退職後の療養と、ご健闘を祈念します。

(中島義雄)

山本さんの名前を頭に織り込んだ短歌です。

やま 山不動
も 孟母のこころ
と 説く人よ
やす やすらぐ心
ろう 老成持重(ろうせい
じちよう)

「山のように泰然自若として動かす、孟子の母のように『初志貫徹』を説き、豊富な知識と経験の上での慎重な人が、組織全体を安らがせてくれる」という意味で、山本さんへの感謝の一首です。慰労会の席で額に飾り、山本さんへ贈呈しました。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員の希望者全員を正社員化を。

めどせ、均等待遇

なくそう差別！

ユニオンは労基法裁判に勝利するぞ！

期間雇用パート労働者の皆さん！ 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1 集-山本, 2 集-向井, 3 集-山田, 郵便-高田, ゆうちよ銀-上筋, 他支部・分会の役員へ。